

# 令和4年度事業報告書

公益財団法人 東京医科大学がん研究事業団

## 目 次

1 .	がんの予防、治療及び撲滅のために必要な各種の研究・調査事業	P 2	～	P 6
2 .	がんの研究者に対する研究助成事業	P 6	～	P 7
3 .	がん検診事業及び健康診断事業等	P 7		
4 .	医師等に対する教育・研修事業	P 7	～	P 8
5 .	がんに関する正しい知識を普及するための講演会等実施事業	P 9		
6 .	会議	P 9		

## 1. がんの予防、治療及び撲滅のために必要な各種の研究・調査事業（定款第4条3号）

### (1) 予防、治療等に関する研究

#### ア 肺がんの予防・早期発見に関する研究

##### a. AI画像技術による肺結節の質的診断（継続）

富士フィルムと本学の共同研究で、陰影の性状の特徴所見を把握、解析するAIを搭載したシナプスビンセントシステムを開発した。本システムでは、CT上の肺結節をAIが自動で同定し、すりガラス成分、充実成分の画像解析を行い、測定者間の誤差のない客観的な体積・割合の算出が可能である。腫瘍径2cm以下の肺癌切除例157例を対象に、本システムにより自動解析した因子のうち、充実成分体積が独立した予後不良因子となり、本システムの臨床応用への可能性を報告した。

##### b. Liquid biopsy による肺がんの早期発見システムの開発（継続）

肺がんでは、抗がん剤治療を選択するために遺伝子変異検査が必須となっている。従来は組織検査が必要であったが、より簡便に調べる方法を検討した。分子病理学分野との共同研究により、肺癌11例、健常者3例の血漿検体からエクソソームを回収し、miRNAを抽出した。エクソソームmiRNAの網羅的解析を行い、肺癌と健常者におけるmiRNAの発現パターンの違いを同定した。続いて、167症例の肺癌および健常者のサンプルから候補エクソソームmiRNAの発現解析を行なった。エクソソームmiR-34aは肺腺癌および肺扁平上皮癌に、エクソソームmiR-163bは肺腺癌において、有意に低値を示していることを報告した。

##### c. 肺癌骨転移の早期発見を目指したバイオマーカー研究

進行・再発肺癌において、骨転移は比較的頻度の高い転移部位の一つである。骨折や疼痛などで発見され、パフォーマンスステータス低下のため、適切な治療機会を得られないこともあり得る。肺癌骨転移に特異的なバイオマーカーは未だ解明されていないため、その探索を目的として、肺癌細胞株を用いた動物実験、臨床検体を用いた研究を進めている。動物実験は、肺癌骨転移モデルマウスを作製し、骨転移細胞から抽出したエクソソームの候補となるバイオマーカーの探索を進めている。また臨床検体による研究は、肺癌骨転移の診断を受けている症例から血液検体を回収し、エクソソームの抽出およびマーカーの同定を検討していく予定である。

#### イ 肺がんの治療に関する研究

##### a. 低侵襲治療法の開発

###### ① VR・AR・MRを用いた低侵襲肺癌手術に関する臨床研究

小型肺癌に対して胸腔鏡をはじめとした低侵襲手術が行われるようになり、正確な腫瘍位置の同定や肺区域切除時の区域間同定は、計画通りの手術を遂行する上で重要である。VR(virtual reality)・AR(augmented reality)・MR(mixed reality)の技術を用いて、手術室で術野や胸腔鏡のモニター上に3D肺モデルを自由に重ね合わせることが可能であり、肺区域切除術もしくは肺部分切除術を予定した症例に対して、腫瘍位置および区域間のマーキングの有用性を検証している。現在、症例集積中である。

###### ② AI画像技術による肺がんの縮小手術適応症例の選別（継続）

AIを装備したシナプスビンセントシステムやPET-CTで得られる諸因子を解析することにより、同一病期でも症例個々では悪性度が異なることを評価している。早期かつ低悪性度の症例を選別し、縮小手術の新たな適応基準を作成すべく症例を集積している。

###### ③ ロボット支援による肺がん手術の臨床研究（継続）

肺癌に対するロボット支援手術は保険収載されるに至ったが、手術所見、術後経過などの臨床情報を前向きに登録することが要求されており、登録研究の一環となっている。ロボット手術に基づく遠隔手術の研究班に属して、実用化に向け研究中である。

b. 肺がんの集学的治療に関する研究

① ゲノム医療の臨床応用（継続）

非小細胞肺癌では、新たな遺伝子異常を検査するオンコマインが開発され、一度にEGFR遺伝子変異, ALK融合遺伝子, Ros-1融合遺伝子, BRAFなどを同時に評価することが可能となり、臨床応用されている。外科的切除術後の再発肺癌に対してオンコマインCDxを用いた網羅的な46遺伝子の変異・融合遺伝子解析を行い、コンパニオン診断だけでなくそれ以外の遺伝子異常の情報も得ることが可能となっている。新しくKRASG12C変異に対する薬剤が開発された。データベースより7例に同変異を認めていた。今までは治療対象となる変異ではなかったが、今後、経過によって新しい薬剤が使用されることになる。今後今までに治療対象となっていなかった変異に対して新しい薬剤が開発されることが期待される。

② 免疫チェックポイント阻害剤の効果予測因子の研究（継続）

肺癌患者血清由来エクソソーム中のPD-L1発現が免疫治療効果と有意に相関することを報告した。今後はイメージングバイオマーカーとしてPET/CTにおける糖代謝因子と血清由来エクソソーム中PD-L1及び腫瘍PD-L1発現との関係を調べ、免疫治療効果予測、耐性化機序にまで及び分子生物学的検討を行う臨床試験を開始した。

③ 免疫チェックポイント阻害剤の術前導入療法、術後補助療法の治験参加（継続）

リンパ節転移陽性あるいは大型の非小細胞肺癌症例に対して、抗癌剤と免疫チェックポイント阻害剤の併用あるいは免疫チェックポイント阻害剤単独による術前導入療法を行ってから手術を施行する治験、あるいは進行肺癌の術後に免疫チェックポイント阻害剤を補助療法として使用する治験に参加している。

④ 分子標的治療薬を用いた術前導入療法の治験参加

ドライバー遺伝子変異陽性の肺癌症例を対象として、分子標的治療薬を用いた術前導入療法を行ってから手術を施行する治験、あるいは進行肺癌の術後に補助療法として使用する治験に参加している。

⑤ 肺癌術後オリゴ転移再発に対する局所治療の有効性を検証するための多施設共同第III相試験

JCOG2108試験で、現在プロトコール作成中。今月中に一次審査が終了予定であり、今年中に登録開始を予定している。

⑥ 肺扁平上皮癌に対する免疫チェックポイント阻害剤の効果予測因子に関するAI病理解析

肺扁平上皮癌のHEスライドを用いて、人工知能（AI）解析による細胞核形態解析を行った。症例は術後再発症例とIV期症例を集積し、検証群と解析群に分けて解析した。効果予測に関しては、免疫チェックポイント阻害薬（ICI）効果あり群（CR/PR/6か月以上SD）/効果なし群（6か月以内SD/PD）に分類した。まず検証群において、16例（術後再発症例）で合計476個のROI（総細胞核個数319763個）を抽出し、ICI効果あり群/効果なし群の分離精度はROI単位で100%であった。次に、解析群18例（IV期症例）で合計102個のROI（総細胞核個数59478個）を抽出し、その分離精度はROI単位で49.0%、症例単位で50.0%であった。精度が低い原因として、手術検体と生検検体で細胞核の特徴量が異なっていたことが考えられた。現在、術後再発症例のさらなる集積を行い、今後再検証を行う予定である。

c. 肺がんの個別化医療の研究

① PET-CTを用いた肺がんの個別化治療法の探索（継続）

PET-CT検査での腫瘍のSUVmax値が予後と強い相関があることを明らかにした。広島大学、神奈川県がんセンターとの多施設共同研究で現在まで3000例程度の症例集積がある。画像のAI診断と併用することにより、症例個々の悪性度評価が可能であることを明らかにした。MTV, TLGなどSUVmax以外の指標が肺

癌術後補助療法の効果予測因子となり得ることも上記施設との共同研究で立証した。

- ② ゲノム解析によるがんの質的評価と薬剤選択に関する研究（継続）  
完全切除されたstage II-IIIの非小細胞非扁平上皮癌症例を対象に行われた術後化学療法の有効性を検証する臨床試験（JIPANG試験）では、シスプラチン＋ペメトレキセドの標準治療であるシスプラチン＋ビノレルビンに対する非劣勢が証明された。当院も本研究に協力し、今回、その予後因子を解析する共同研究が行われた。手術で切除された検体を用いて、389症例でシーケンシング解析が行われ、409遺伝子が解析された。EGFR遺伝子変異を認める症例が有意に再発が早いことが示された。一方で、p53変異やkras変異では、変異の有無で再発は変わらなかった。多変量解析の結果では、病理病期およびEGFR遺伝子変異結果が予後不良因子となった。

- ③ 免疫学的治療のバイオマーカーの研究（継続）  
免疫チェックポイント阻害薬の進歩により肺癌に対する治療戦略は大きく変化を認めている。臨床検体を用いて肺癌原発巣と遠隔転移巣における免疫担当細胞や免疫関連遺伝子発現レベルの違いに着目して、肺癌術後遠隔転移再発巣に対する免疫学的治療の効果予測バイオマーカーの探索を行った。肺癌術後再発を認めた48例を対象に、免疫応答細胞に関係する遺伝子発現解析を実施した。現在、免疫学的治療の効果予測に関連する遺伝子や免疫微小環境の解析を進めている。

- d. 胸膜悪性中皮種に対するウイルス治療の臨床試験  
手術不能の悪性胸膜中皮腫症例の治療としてHerpes simplexをベクターとする抗腫瘍物質を胸腔内に投与する治療（第I相の医師主導臨床試験）が厚生労働省に認可され、東大医科学研究所とともに進めている。6例の予定治療を完遂し、第II相試験の計画を開始した。

ウ 消化器がんの予防に関する研究を4月から3月に実施した。

- a. Helicobacter pylori 除菌による胃がんの予防（継続）  
これまでの研究によりHelicobacter pylori 除菌後菌陰性化は順調に図られている。これまでに除菌後菌陰性化後の発癌は認められていないが、引き続き長期による観察が必要である。
- b. メトホルミンによる膵がんの予防（継続）  
予防の効果を検討するには長期の研究となるため、現在糖尿病患者におけるメトホルミン常用の有無と膵癌発生率との後ろ向き比較検討試験をあわせて計画中である。
- c. インドメタシンによる大腸ポリープの予防（継続）  
予防の効果を検討するには長期の研究となるため、現在大腸癌患者におけるインドメタシン常用の有無と大腸癌発生率との後ろ向き比較検討試験をあわせて計画中である。
- d. ウルソデオキシコール酸の胆道癌発生の抑制に関する研究（継続）  
これまでにウルソデオキシコール酸内服中の胆道発癌は認められていないが、引き続き長期による観察が必要である。
- e. 潰瘍性大腸炎の抗炎症作用薬による発癌リスク抑制に関する研究（継続）  
これまでにNSAID内服中の大腸発癌の明らかな効果は認められていないが、引き続き長期による観察が必要である。

(2) がんの病態等に関する研究

ア 肺がんの生物学的悪性度評価に関する研究

- a. 次世代シーケンサを用いたゲノム解析（継続）  
次世代シーケンサを用いた遺伝子解析を用いた解析が有効であることを示してきた。分子病理学講座、人体病理学講座との共同研究で、当科で手術を行った肺癌患者6例のFFPE検体を用いて、全エクソーム解析を行い、変異スペクトラムの解析を行い、安定した解析フローであることをこれまでに確認して

いた。同サンプルからの血漿検体を用いて循環癌細胞由来DNAを抽出して変異スペクトラム解析を行い、FFPE検体と同様の変異スペクトラムを示すことを報告した。本解析パイプラインを用いて、今後解析対象症例を増やしていくことを予定している。

b. AI画像診断による肺がんの悪性度評価の研究（継続）

シナプスビンセントシステムに肺癌のCT画像を学習させ、その充実部所見とすりガラス所見をAIにより自動解析し、悪性度評価を行なっている。当院において肺切除施行された症例の画像、病理検査結果、臨床情報を参照しラベリング、データベースを作成し目的に沿った深層学習アルゴリズムのモデリングを行い、AIを用いた肺癌診断、術後再発予測、遺伝子変異予想などの確立を目的に研究を行なっている。

c. メタボローム解析の肺がんスクリーニングへの応用（継続）

代謝物を網羅的に測定できるメタボローム解析を利用して、血液検体や唾液検体で肺癌をスクリーニングし得る物質の同定を進めている。肺癌切除検体を用いて代謝パスウェイの変動を解析し、予後予測性の高い物質が探索できた。また、手術時に胸腔内洗浄生理食塩水を用いて、メタボローム解析を行った。今後臨床的な有効性を検証していく。

d. 血清由来エクソソームを用いた脈管浸潤陽性肺がんの特性研究（継続）

早期肺癌切除例を病理学的脈管浸潤と術後再発の有無によって分類し、血清よりエクソソームを抽出した。解析群のサンプルを用いてRNA-seqを行い、脈管浸潤と術後再発に関連のあるエクソソーム由来micro RNAを同定した。検証群による遺伝子発現解析で候補マーカーを絞り込み、Pathway解析、GO解析を行った。今後は臨床病理学的因子との関連性について検討し、実臨床への応用を図る。

e. 肺扁平上皮癌細胞核の病理AI解析による早期再発予測に関する研究（継続）

肺扁平上皮癌切除例のHEスライドを用いて、AIによる細胞核形態解析を行った。症例を解析群、検証群に分け、まず解析群で早期再発（術後2年以内）に関する精度について解析した。56例で合計856個のROI（総細胞核個数2605-33132個）を抽出し、無再発群/早期再発群の分離精度はROI/症例単位で100%であった。検証群19例で合計284個のROI（総細胞核個数5709-19903個）を抽出し、その分離精度はROI単位で84.5%、症例単位で94.7%であった。また92項目の核特微量のうち、細胞核面積、エントロピーなど無再発群/早期再発群予測に係する有意な特微量を抽出し得た。

f. 肺小細胞癌の新規治療標的としての神経変性疾患関連バイオマーカー解析

肺小細胞癌切除標本を集積し、小細胞癌のマスター転写因子(ASCL1/NEUROD/POU2F3/YAP1)発現の優位性によって分類した。各優位型を少なくとも3例含むようにサンプルを調整し、正常肺サンプルをコントロールとして次世代シーケンサー解析を開始した。

g. 超高分解能質量顕微鏡を用いた肺癌の悪性度に関する研究

2種類のがん培養細胞株(A549, PC9)を超高分解能質量顕微鏡で個々の細胞を観察・成分イメージングを行った。本装置を用いれば個々の細胞レベルでの元素分布、濃度の可視化が可能となり、2つの細胞株の間で成分の違いがあることが分かった。更に、細胞ごとのK/Na濃度比について悪性度の高いPC9ではA549よりも比が有意に高いことを初めて示した。

イ 間質性肺炎合併肺癌の特性と急性増悪のリスク評価

a. PET-CTを用いた術後急性増悪の術前予測法の開発（継続）

間質性肺炎患に合併した肺癌に対し手術を行う場合、術後の間質性肺炎の急性増悪が深刻な合併症である。術前の肺CTで正常部位のSUVmax値が上昇している症例は術後急性増悪の高危険群であることを発見した。NCDのリスクスコアと併用して発生危険率の算出を試みている。

b. 間質性肺炎合併肺癌症例に対する内視鏡的レーザー治療の臨床試験  
(継続)  
間質性肺炎合併し、手術及び放射線治療が不適応の末梢型小型肺癌に対する光感受性物質 (ME2906) 及びPDT半導体レーザー (PNL6405PLC) を用いた光線力学的療法 (photodynamic therapy; PDT) の有効性及び安全性を、無治療群と比較する第Ⅲ相臨床試験中である。

c. 間質性肺炎合併肺癌の術後急性増悪予防に関する研究  
間質性肺炎を合併する肺癌では、手術後に急性増悪をきたし、死に至ることが多く予後不良とされている。通常80%以上とされるIA期で5年生存率は、59%と報告されている。術後急性増悪を予防して5年生存率を改善する目的で研究が行われている。特発性肺線維症を適応症とする世界初の抗線維化薬であるピルフェニドンの術前投与の有効性を検討する臨床試験が進行中である。

ウ 消化器がん (食道がん、胃がん、大腸がん、肝臓がん、膵臓がん、胆道がん) に関する研究

a. 潰瘍性大腸炎の発癌関連遺伝子に関する検討 (継続)  
経鼻内視鏡は鎮静も不要であり、ある一定のニーズがある。当科では以前より日常診療に多くの経鼻内視鏡による胃癌スクリーニングの有用性を検討しており、引き続き症例リクルートを行なっている。

b. 膵臓がんに対する Share wave elastography を用いた繊維化の研究 (継続)  
Share wave elastography を用いた繊維化の研究を行い、現在論文発表した (J Hepatobiliary Pancreat Sci. 2023 Mar;30(3):351-359.)。現在、超音波内視鏡による Share wave elastography の研究をおこなっている。

c. メタボローム解析による胃がん診断に関する研究 (継続)  
本研究はすでに論文出版された (Digestion. 2023;104(2):97-108.) 現在サブ解析をおこなっている。

d. 肝細胞がんに対するナノナイフ治療の有用性の検討 (継続)  
高度先進医療として行っており、予定10症例を終了し重篤な有害事象もなく良好な結果が得られた。現在、更なる症例追加予定で進めている。

e. 消化器がんに伴う十二指腸狭窄に対する超音波内視鏡ガイド下胃空腸吻合術の長期予後に関する研究 (継続)  
これまで行った43例の長期観察中である。

f. 慢性膵炎発癌リスクの疫学的研究 (継続)  
慢性膵炎症例も多くはなく、引き続き症例リクルートを行なっている。

## 2. がんの研究者に対する研究助成事業 (定款第4条7号)

### (1) がん研究者に対する研究助成金の交付 (令和4年10月)

令和4年度がん研究助成金授与候補者募集に対し、15名より申請を受け、提出された申請書を研究助成金審査委員会 (委員会開催日:令和4年10月13日 (木) 参加委員数:5名 (内、外部委員2名)) において慎重に審査した結果、下記の研究者3名に対して研究助成金を交付した。

	氏名	所属	研究題目 (交付金額)
①	一宮 匡	東京医大 消化器内科学	炎症性腸疾患における血液中エクソソーム解析による腸炎関連大腸癌の診断法の開発 (1,000,000)
②	平澤 陽介	東京医大 泌尿器科学	ナノワイヤテクノロジーを用いた尿中miRNAによる膀胱癌早期診断法の確立 (1,000,000)

③	秋本 佳香	東京医大 消化器内視鏡学	大腸がん早期発見のための世界共通の非侵襲的バイオマーカー開発と予防戦略 (2,000,000)
---	-------	-----------------	---

### 3. がん検診事業及び健康診断事業等（定款第4条1号・2号・9号）

#### (1) がん検診

肺がん検診、消化器がん検診を中心に、本事業団所在地等にて4月から3月に胃  
部検診車1台、胸部検診車1台にて実施した。

自治体契約集団検診等 11,337名（健康診断含む）（内、上高地診療所で  
の肺がん検診受診者数は229名）

膵臓がん、肝臓がんの早期発見法の確立を目指した研究については、腹部エコー  
や超音波内視鏡検査により肝細胞がん22例、肝外胆管がん2例、膵がん4例と前  
癌病変とされる膵管内乳頭粘液性腫瘍20例の拾い上げが可能であった。引き続き  
早期発見を目指し継続して行く。

#### (2) 検診データバンクの構築

検診データバンクの構築に関し、令和4年度は胸部レントゲン10,021件、  
胃部レントゲン1,490件の合計11,511件を取込み、内、10,021件  
を専門医がオンライン上で読影を実施した。各種検診データ及び画像資料等の蓄積、  
整理並びに保管方法等についての検討を4月から3月に実施した。併せて、令和4  
年度においては、平成24年度に導入した画像管理システムの更新を実施した。

#### (3) 健康診断

収益事業として、がん検診受診者等（小中高大学の教職員健診を含む）の希望に  
応じて健康診断を4月から3月に実施した。

### 4. 医師等に対する教育・研修事業（定款第4条4号）

#### (1) 一般教育・研修

ア 肺がんに関して以下の研修会等を東京都内の開業医、専門医に対して、東京  
医科大学と共催して実施した。

##### a. 学術講演会

開催名：第39回日本呼吸器外科学会学術集会（主催）

開催日：令和4年5月20日（金）・21日（土）

開催名：第865回外科集談会（日本臨床外科学会東京支部会）（主催）

開催日：令和4年9月17日（土）

##### b. がん診療連携に関する講演会（新宿区のがん診療拠点病院と共催） （Web開催）

開催名：第27回Shinjuku Lung Cancer Summit Meeting

開催日：令和4年7月13日（水）

演者：名古屋大学大学院医学系研究科微生物・免疫学講座分子細胞免  
疫学 西川 博嘉 先生

演題：「免疫チェックポイント阻害剤における基礎研究」

演者：近畿大学病院 Kindai Hospital Global Research Alliance Ce  
nter 光富 徹哉 先生

演題：「非小細胞肺がんの周術期治療における最新の話」

イ 消化器がんに関して以下の研修会等を東京都内の開業医、専門医に対して、東京医科大学と共催して実施した。

- a. 消化器がんの最新情報に関する講演会
- b. がん診療連携に関する講演会
- c. 東京医科大学大学院生に対する消化器がんの最新研究に対する講演会

開催名：大学院特別講義  
開催日：令和4年5月17日（火）  
演者：半蔵門胃腸クリニック 院長 掛谷 和俊 先生  
演題：「人生を変えた、恩師からの一言」

開催名：大学院特別講義  
開催日：令和4年5月31日（火）  
演者：高知大学医学部 消化器内科 教授 内田 一茂 先生  
演題：「1型自己免疫性膵炎からみたIgG4関連疾患の現状」

開催名：大学院特別講義  
開催日：令和4年8月2日（火）  
演者：岡山大学病院 新医療研究開発センター 内田 大輔 先生  
演題：「医療機器開発のイロハ」

開催名：大学院特別講義  
開催日：令和4年8月23日（火）  
演者：神奈川県立がんセンター 肝胆膵 部長 上野 誠 先生  
演題：「胆膵がん化学療法の実状と課題」

開催名：大学院特別講義  
開催日：令和4年11月22日（火）  
演者：手稲溪仁会病院 消化器内科センター長 瀧沼 朗生 先生  
演題：「胆膵疾患診療UP TO DATE」

開催名：大学院特別講義  
開催日：令和4年12月13日（火）  
演者：東京大学医学部附属病院 光学医療診療部  
准教授 中井 陽介 先生  
演題：「膵臓癌のサーベイランスは可能か？」

演者：自治医科大学内科学講座消化器内科学部門  
主任教授 山本 博徳 先生  
演題：「ダブルバルーン内視鏡およびESDの開発から学んだこと」

## (2) がんの専門医養成のための教育・研修

ア 包括的な知識及び広い知識を有する肺がんの専門医を養成するため、東京医科大学の研修医、大学院生、および東京都内のがん専門医、開業医を対象として、肺がん教育事業を実施した。

- a. 外部の施設より研究者を招聘しての講義を実施  
開催名：Road to Top Surgeon Invited Lecture  
開催日：令和4年11月10日（木）  
演者：藤田医科大学 医療の質・安全管理部 医療の質管理室  
教授 安田あゆ子 先生  
演題：「外科医が知っておくべき質管理」

## 5. がんに関する正しい知識を普及するための講演会等実施事業（定款第4条5号）

- (1) がんの予防等に関する講演会（公開講座）の開催  
一般市民を対象にした、がんの予防等に関する講演会（市民公開講座）の開催については、新型コロナウイルスによる感染拡大防止の観点から動画配信にて次の市民公開講座を実施した。
- 動画配信月：令和4年6月  
講師：東京医科大学病院 呼吸器・甲状腺外科  
准教授 垣花 昌俊  
講演テーマ：肺がん治療と向き合う

## 6. 会 議

### 1. 理事会

- (1) 令和4年6月1日（水）次の議案を審議、承認した。（書面決議）
- 第1号議案 令和3年度事業報告の承認の件  
第2号議案 令和3年度決算書類等の承認の件  
第3号議案 令和4年度定時評議員会の招集について
- (2) 令和4年10月21日（金）次の議案を審議、承認した。
- 第1号議案 令和4年度がん研究助成金の授与者および授与額の承認の件  
第2号議案 管理運営資金の取り崩しおよび組み入れの承認の件
- (3) 令和5年3月20日（月）次の議案を審議、承認した。（書面決議）
- 第1号議案 令和5年度事業計画書の承認の件  
第2号議案 令和5年度収支予算書等の承認の件  
第3号議案 令和4年度第2回評議員会の決議の省略の件

### 2. 評議員会

- (1) 令和4年6月22日（水）次の議案を審議、承認した。（書面決議）
- 第1号議案 令和3年度決算書類等の承認の件
- (2) 令和5年3月28日（火）次の議案を審議、承認した。（書面決議）
- 第1号議案 令和5年度事業計画書の承認の件  
第2号議案 令和5年度収支予算書等の承認の件

### 3. 委員会

- (1) 研究助成金審査委員会
- ・令和4年10月13日（木）  
議題 令和4年度がん研究助成金申請書の審査及び決定について

以上